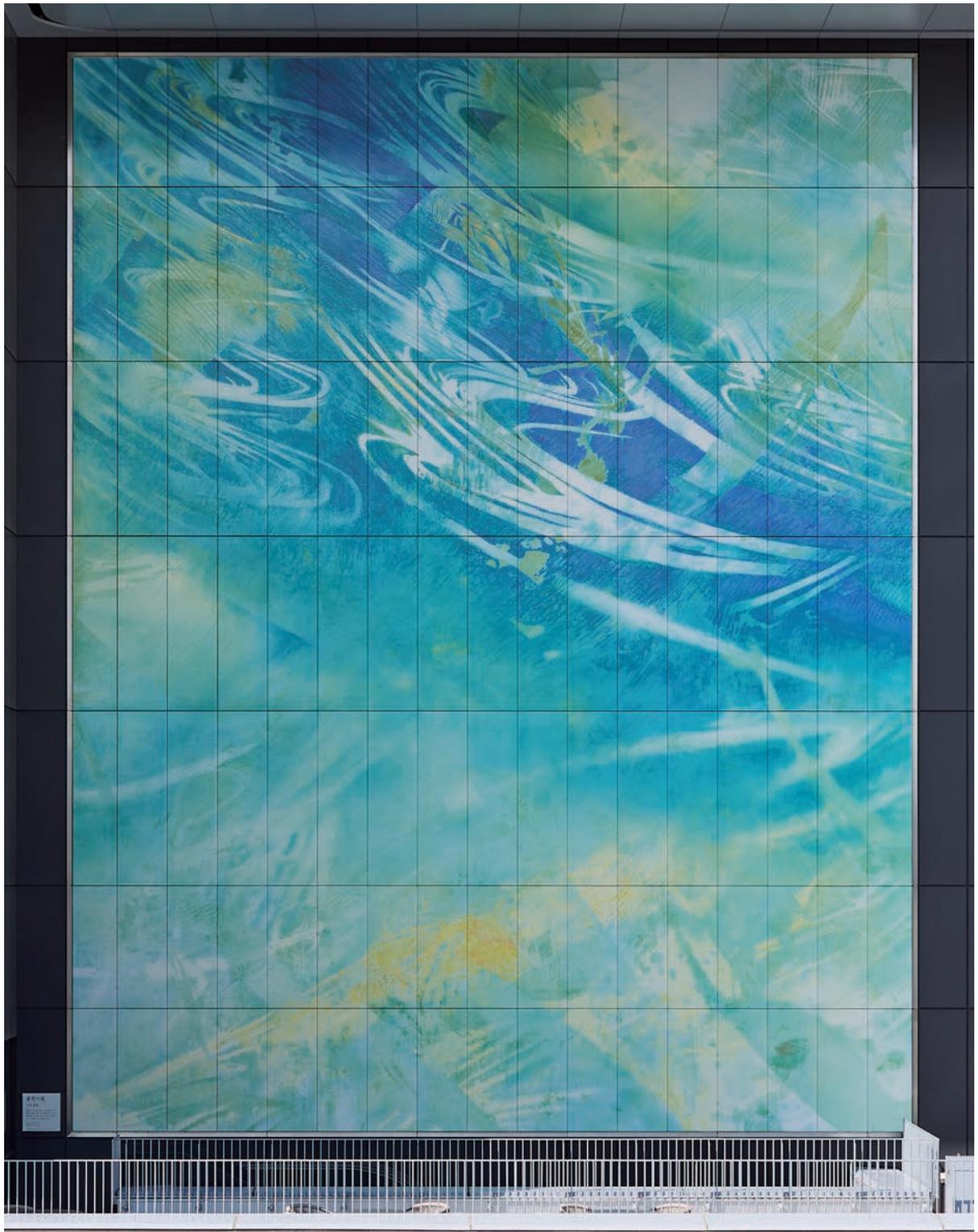


〈誌上作品発表〉

日本画作品を原画とする大型陶板画製作

久世直幸

私の制作した日本画作品「空-春きざす」(2014年制作)を原画にした陶板画を製作して、新校舎のシンボルとしたい、と作品所蔵先の愛知淑徳学園から依頼があった。学園創立120周年、愛知淑徳大学創立50周年の記念事業として、愛知県長久手市の大学キャンパス内に新たに校舎を建て、その外壁に陶板画を設置する計画であった。また原画となる作品は赤色が基調だが、陶板画はスクールカラーである青色に色調変換をする可能性もあるという。陶板画の作品サイズは縦13メートル、横10メートルと巨大なもので、屋外設置の陶板画としては国内最大級の計画であった。陶板の製作は徳島県の大塚国際美術館の「陶板名画」で実績のある大塚オーミ陶業株式会社が行い、私は滋賀県信楽町の工房に何度も赴き製作に携わることになった。原画の作成や釉薬の調合、陶板の焼成やレタッチ、耐震試験など工程は多岐に渡り、2年半の製作期間を費やして2023年に完成した。日本画材と陶器の釉薬は類似の使用感があり、筆や刷毛やスプレーガンなどを用いて彩色を施すなど、日本画と同じ感覚で製作することができた。



陶板画「蒼穹の風」全景



センタースクエアから新1号棟と陶板画を臨む



新1号棟と陶板画 3階テラスの学生と共に



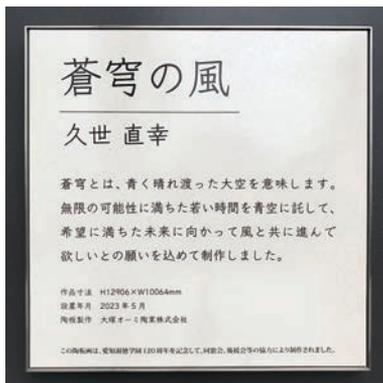
日の入り瞬間の新1号棟と陶板画



日没直後 マジックアワーの新1号棟と陶板画



陶板画は2023年の5月、建物の竣工と併せて除幕式が行われ公開された。その後、建物の南側に3色の青色のタイルを配置した広場「センタースクエア」が2024年に完成し、工事が完了した。



陶板画の脇に設置された作品解説の陶製キャプション



センタースクエアに配置されたタイル。1905年の学園設立から2024年までの学園のあゆみが121枚のタイルに刻まれた。陶板画の基調色の青色との調和を狙い、タイルも青色の階調で表現された。



大塚オーミ陶業株式会社の信楽工場内のプラントで、釉薬によるレタッチ（加筆）をおこなう



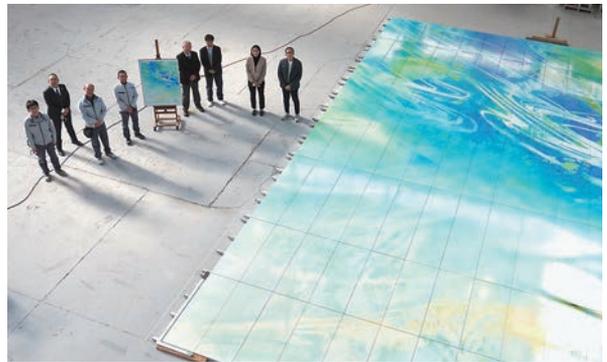
レタッチ風景



レタッチ風景



レタッチ風景



レタッチが完成した陶板画とスタッフの皆さん



工程画像 ①-1



①-2

原画を超高解像度でスキャンし、作品データの基調色を赤系から青系へと変換を行った。屋外設置のため、耐光性のある釉薬で再現可能な範囲の色である必要があるため、作業は困難を極めた。



②-1



②-2

理想の色彩を釉薬で実現するため、また設置時の高さや自然光での見え方を考慮し、1/17に縮小したサイズで試作を重ねた。焼成の前後で色が変わる焼き物の特徴に悩まされながら製作した。



工程画像 ③-1



③-2



③-3

試作の陶板への彩色。筆や刷毛は日本画制作で使用する物を用いた。

調整された釉薬



工程画像 ④-1



④-2



④-3

実物の製作は大塚オーミ陶業株式会社 滋賀県信楽町にある巨大なプラント内で行った。加筆時は陶板全体が 視界に入らないため、高所から全体のバランスを見ながら制作を進めた。



119枚に分割された陶板を屋外の地上20mを超える高さに設置することから、一般財団法人日本建築総合試験所 での耐震実験を実施した。大地震相当の揺れでも陶板が落下しないこと、隣り合った陶板が相互に接触して破損しないことを確認した。陶板の設置施工には17日間を費やし、高さ13m、横10mの巨大な陶板画が完成した。

陶板画製作のプロセス

1. 製作のはじめに

完成された作品を陶板という媒体に置き換える作業は、作品をいかに忠実に写せるかに係っている。とはいえ焼き物の釉薬で屋外設置に耐えられる色には限度があるため、原画そのままを陶板画にせず、原画を尊重しつつオリジナルの陶板画を製作することを目標とした。そのため基調色は原画の赤系色ではなく学園のイメージカラーである青色に変換し、より爽やかでみずみずしい作品を目指した。作品のテーマも「希望」や「未来」といった、より大学に相応しいものをイメージした。

2. 原画の製版と転写紙への印刷

原画となる作品を超高解像度スキャンをおこない、デジタルデータを色変換して陶板画の版を製作する(工程画像①-1、2)。それを転写紙にシルクスクリーンで釉薬を印刷し、陶板に貼り付けて焼成する。はじめは縮小サイズで試作を重ね、色と質感をイメージに近づけ、自然光での見え方も考慮しながら徐々に原寸の製作を行う(工程画像②-1、2)。

3. レタッチ(加筆)

試作の陶板に、釉薬で直接彩色を施す(工程画像③-1~3)。焼成後の色や状態の確認後、実物に彩色を開始(工程画像④-1~3)。筆や刷毛だけでなくスプレーガンなど、釉薬を広範囲に塗布できる画材も用いる。全体を見ながらレタッチと焼成を繰り返し、完成へと向かう。



題名	「蒼穹 ^{そうきゅう} の風」
サイズ	H12,906×W10,064×T20 mm(陶板119枚組み)
場所	愛知淑徳大学 長久手キャンパス新1号棟 南側外壁(3~6階) 愛知県長久手市片平2丁目9
製作期間	2021年1月~2023年5月
陶板製作	大塚オーミ陶業株式会社
設計	株式会社日建設計
施工	株式会社大林組
工法	標準乾式工法 (アスロックレールファスナー工法下地)
撮影	鵜飼秀吉(POWER STUDIO)

「蒼穹」とは、青く晴れ渡った大空を意味する。学生たちが無限の可能性に満ちた若い時間を青空に託して、希望に満ちた未来に向かって風と共に進んで欲しい、という願いを込めて制作した。

原画 日本画作品「空—春きざす」2014年 1167×910mm 愛知淑徳学園 蔵

風がまだ冷たい2月の渥美半島で取材をした作品。拡がりのある空と鮮やかな菜の花の対比が美しい景色に心惹かれ、朝から座り込んでスケッチをした。昼を過ぎた頃、それまで空を覆っていた薄雲が去り、春の訪れを確かに感じる暖かい光と風があたりに力強く溢れた体験をした。この時に得た感覚から、目の覚めるような鮮明な空気や風の温度をモチーフにして、待ち望んだ春の到来を喜ぶ躍動感を鮮やかな色彩と自由な筆致で表現した。





久世直幸 NAOYUKI KUZE

- 略歴
- 1972年 石川県金沢市生まれ
 - 1998年 加山又造先生 京都天龍寺 天井画「雲龍図」制作助手を務める
 - 1999年 多摩美術大学 大学院 美術研究科 日本画領域修了
 - 2004年 第31回創画展にて創画会賞を受賞('09、'10 同賞受賞)
 - 2005年 第31回春季創画展にて春季展賞を受賞('06 同賞受賞)
 - 2008年 個展(松坂屋名古屋店 美術画廊、銀座店へ巡回 '16、'24)
 - 2010年 創画会正会員に推挙
 - 2012年 「第1回 東京都美術館ベストセレクション展」(東京都美術館)
 - 2016年 個展(東海東京証券プレミアサロン)
 - 2021年 「現代日本画の系譜 - タマビDNA展」(多摩美術大学美術館)
 - 2023年 愛知淑徳大学 新1号棟 外壁陶板画 完成

- 所蔵
- 愛知淑徳大学 愛知工業大学 藤田医科大学
 - 名古屋市立大学医学部附属 西部医療センター
 - 伊勢湾海運株式会社 株式会社大垣共立銀行 株式会社大林組
 - 清水建設株式会社 東海東京フィナンシャル・ホールディングス株式会社
 - 株式会社豊田スタジアム 日本ユニシス株式会社 株式会社榎屋
 - 高野山真言宗正寿院 東京都多摩市

- 現在
- 一般社団法人創画会 正会員 京都日本画家協会 会員
 - 大阪芸術大学 美術学科日本画コース 教授 愛知県名古屋市在住



「流転 - 空」2012年 2300×3560mm
東海東京フィナンシャル・ホールディングス株式会社 蔵



「空 - 紺碧」2016年 1800×3650mm
東海東京フィナンシャル・ホールディングス株式会社 蔵